



アーティストの感覚

昨日の続きで『都市と野生の思考』から。今回の引用は100～102ページ。続きが読みたくなるんじゃないかなあ～

*

鷺：東日本大震災の後、若いアーティストが大挙して被災地にボランティアに出向きました。まるで居ても立ってもいられないかのようなムーブメントが起こった。その根底に何があったのか。アートの起源にかかわる何かがあったように思うのです。つまり「何もかもが根こそぎにされた土地で、最初に立ち上がるものの中にアートがあるのか」と、彼らはそんな気持ちに突き動かされたのではないのでしょうか。

山：鷺田さんも被災地に行かれましたね。

鷺：被災地で、なんとも不思議な光景を目にしたことがあります。アーティストたちもボランティアとして、瓦礫を運んでいましたが、彼らだけ置き方が違う。たとえば、瓦礫を詰めた袋でピラミッドをつくっていたりしてね。

山：遊び心みたいなものですか。

鷺：それを見た被災者のおばあさんが「あれまあ！」とにっこり微笑んだ。たかが瓦礫を積むだけのことだけれど、ただ積むだけではない。そこに形を与えることで、見る人の気持ちを和ませたり、力を与えたりできる。これこそはアートの力でしょう。

山：アートは本来そういう形で生活の中にあっただと思います。音楽でも絵画でもそうですが、見えないものを共有する試みですね。

鷺：その結果、生き延びるための原動力がわき上がってくる。知らぬ間に、みんなで調子を合わせて歌い始め、深いつながりが生

まれ…。

山：生物学的に言えば、それは「共感」ですね。そもそも表現というのは、それを受け取る他者の存在を前提とするものです。アートがあることによって人間同士は、動物とはまったく異なる関係性を築けるようになった。

鷺：おそらくアートの根源には、ある種のセンサー機能が働いているのです。アートとは何かを考えたときに思うのは、その根底に違和感があること。何か気持ち悪い、居心地が悪いといった感覚です。こうした違和感こそがアーティストをアーティストたらしめている原感覚ではないのでしょうか。彼らには異変を鋭敏に感じ取るセンサーがある。センサーといえ、人間の認知には微分回路と積分回路がある。これは精神科医の中井久夫さんの理論です。微分回路とは、感覚入力のうち変動部分のみを検出し、そこに微細な「徴候」を読み取って、未来を先取りしていく思考回路のこと。一方の積分回路は、過去の経験を「索引」として参照しながら入力を整理しつつ事態に対応していく回路。前者の微分回路は、微細な変化にのみ感応するため、ノイズを拾いすぎて誤作動しやすいし、そのことで動揺も増幅しがちです。後者の積分回路は、過去のデータを参照しつつ働き出すので安定的ですが、突発的な事態には対応が遅れがちで、新奇で重要な徴候を見逃すことがある。

山：確かに微分は接線で、積分は面積ですからね。(以下、農耕と狩猟の話に展開して、アーティストの素性?が解明されていく…)